

「或阿呆の一生」と「西方の人」について

木 山 登 茂 子

はじめに

「西方の人」(昭和二年七月十日脱稿・『改造』八月号)の続篇、「続西方の人」(『改造』九月号)は芥川龍之介の最後の作品である。彼は死の前夜にこれを書き上げ、昭和二年七月二十四日未明に服毒自殺をした。

クリストは「万人の鏡」である。「万人の鏡」と云ふ意味は万人のクリストに倣へと云ふのではない。たつた一人のクリストの中に万人の彼等自身を発見するからである。わたしはわたしのクリストを描き、雑誌の締め切日の迫つた為にペンを抛たなければならなかつた。(略)しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるのもわたし自身にはやめることは出来ない。(続1 再びこの人を見よ)

(5巻210頁)

芥川は続篇執筆の理由を語つた時、クリストの中に自分自身を発見したということとをこのように書いている。正統「西方の人」に一貫してみられる芥川の状態は「歴史的事実や地理的事実を顧み」ず「唯わたしの感じた通りに『わたしのクリスト』を記」(1 この人を見よ)していること、又クリストを自分の「鏡」として書いていることである。それは言いかえると、クリストに共感を寄せ、自分の直面している問題をクリストの人生に投影しているということである。正篇と続篇の間には構成や内容にいくつかの相違点も認められるがこの小論では右に挙げた一貫性に注目し、両作品を合わせて芥川の最後の作品と考へたい。^{注1}

遺稿となつた「或阿呆の一生」(『改造』十月号)は、「西方の人」より後に発表されたが脱稿は同年の六月二十日である。芥川自身の言葉によると、この作品は彼の「詩と真実と」(四十九

剝製の白鳥）であり、自殺の動機となった「ぼんやりした不安」

（「或旧友へ送る手記」遺書）の解剖をした自叙伝である。保吉物以来の自伝的作品群の中で「或阿呆の一生」は死を決意した自己の真実を語ろうとした自画像と呼ぶことができる。

私は、死を目前にした作者によってこのような形で二つの自画像が書かれたこと、また「或阿呆の一生」から「西方の人」へと書き継がれたことについて、それぞれの作品の分析を中心にして考察したいと思う。「或阿呆の一生」の後に「西方の人」が書かれた必然性について論じたものは先行研究にもあるが、^{注2}これらの論文では両作品の表現形式に関する言及が少なかったように思われる。小論では文体や構成の分析をおして主人公の性格、テーマ、そして作者の意識を捉え、両作品を比較検討することによりこの問題を説明したい。

一 「或阿呆の一生」

(1) 文体——主観性・気分・比喩——

「或阿呆の一生」の文の視点は主人公の△彼▽にある。

それは或本屋の二階だった。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新しい本を探してゐた。モオパスサン、ボオドレエル、ストリンドベリイ、イプセン、シヨウ、トル

ストイ、……

そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を読みつづけた。そこに並んでゐるのは本といふよりも寧ろ世紀末それ自身だった。ニイチエ、ヴェルレエン、ゴンクウル兄弟、ダストエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、……

彼は薄暗がりと戦ひながら、彼等の名前を数へて行つた。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根気も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の頭の上に突然ぽかりと火をともした。彼は梯子の上に佇んだまま、本の間に動いてゐる店員や客を見下した。彼等は妙に小さかった。のみならず如何にも見すばらしかった。

「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」

彼は暫く梯子の上からかう云ふ彼等を見渡してゐた。……

… (一 時代) (4巻52頁)

梯子の上の「世紀末」と、「本の間に動いてゐる店員と客」の対照に象徴的な意味を込めて読むと、この一章は二十歳の△彼▽の価値観を示す構図として理解することができるが、それぞれの文は△彼▽の主観を通して書かれている。そしてこのように何ら

かの形で場面設定があり、そこで△彼▽の具体的な行動が語られ視覚・聴覚・嗅覚を通して接した外界に対する反応が加えられて

いる、というのがこの作品の各章の基本的な型である。^{註3} 外界に対する反応——ここでは「人生は……」という独白の形で表れて

いる——は△彼▽の性格を表現する部分であるが、他の章の同じ部分で、特に述語に着目して気づくことは、「想像した」、「思い出した」、「感じた」等を使い△彼▽の連想・回想・気分を取り上げたものが非常に多い、ということである。また、それらは「なにか」感じながら（三家）、「いつか」見いだしてゐた（四 東京）、「妙に感動した」（八 火花）、「いつの間にか」用意してゐた（九 死体）、「なぜかふと」思ひ出した（十二 軍港）等のように微妙な心理の動きを示す副詞により具体性が強められている。以上のような文体の特徴から「或阿呆の一生」の主人公の性格の表現について言えることは、気分（身体的、情緒的感覚面）が主となっていて、それが△彼▽の具体的な体験を通して行われているということである。

次に比喩的表現について考えてみたい。

それは何か木の幹に凍つた、かがやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだった。（三十七 越し人）（62頁）

彼女の顔は（略）月の光の中にあるやうだった。（十八

月／二十三 彼女／二十七 スパルタ式訓練／三十 雨）（57・58・59・60頁）

引用したのは直喩の例であるが、直喩によって連合されたイメージの中には、「木の幹」、「雪」、「月の光」、「立ち木」（四十六 謹）、「朝日の光」（四十七 火あそび）等の自然物が目立つ。

文の視点が△彼▽に同一化されていることを考え合わせると、これらの自然のイメージには△彼▽の心情が託されている、と見ることが出来る。このことは後で述べる風景の問題と関連している。

彼は薔薇の葉の匂のする懷疑主義を枕にしながら、アナトオル・フランスの本を読んでいた。（十六 枕）（56頁）

この文は字義通りに読むと「アナトオル・フランスの本を読んでいた。」という後半は日常の現実的な出来事であるのに対し、前半は非現実的である。また「薔薇の葉の匂のする」と「懷疑主義」と「を枕にする」という言葉の組み合わせは特殊である。このような非現実対現実という要素の対立のあるものや特殊な言葉の組み合わせのあるものを隠喩と考えると、これと同様の隠喩を含むものに「十九 人工の翼」、「三十三 英雄」、「四十 問答」、「四十五 Divan」がある。これらの章には△彼▽の思想に関わる観念性の強いモチーフがあり、それが隠喩という方法上の共通点と対応している。

そこに並んでゐるのは本といふよりも寧ろ世紀末それ自身だつた。(一 時代) (52頁)

「世紀末の悪鬼」は實際彼を虐んでゐるのに違ひなかつた。(五十 俘) (66頁)

「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」(一 時代) (52頁)

ここに引用した箇所はいずれも気分や思想とは異なつた、より根本的な \wedge 彼 \vee の精神の次元を問題にしている。一番目の文に關して言うと、ここで \wedge 彼 \vee は本の背にある作家の名前を見ているのだが、それを「世紀末」という觀念で受けとめている。「本」を「世紀末それ自身だつた」というのは隱喩だが、この「世紀末」は一章と五十章にあり、 \wedge 彼 \vee の一生を覆う象徴的な言葉となつてゐる。三番目のアフォリズムは隱喩により \wedge 彼 \vee の人生批評的な意識内容を提示しているが、これも限られた状況における單なる感想というのではなく、 \wedge 彼 \vee の一生に深く関わる基本命題である。小論ではこれを \wedge 彼 \vee の精神を象徴する言葉として理解し、先の「世紀末」と共に作品の全文脈をとおして(3)でその意味を検討したい。

(2) 構成——時間・空間・風景——

「或阿呆の一生」は題を付した五十一の短章から成り立っている。

(2)では各章の性格を時間・空間・風景という観点から見てみたい。この作品には \wedge 彼 \vee の身のまわりにおきた実生活上の出来事や \wedge 彼 \vee をとりまく環境に關する叙述が多く、その中で時代は正統から昭和にかけての十数年、舞台は東京及びその近郊という作品世界の枠が決定されている。その枠内の時間は、基本的には二十歳から三十代半ば位までの \wedge 彼 \vee の年齢の進行に従ひ直線的に流れ、日常的な時間に近い。大体章の前後が時間の前後と対応する。場面(空間)は、ひとつの章がひとつの場面を持ち、現実的な場面では \wedge 彼 \vee の日常的な出来事が語られ、非現実的な場面(1)で隱喩の例として挙げた(五章)では場面自身が比喩となり \wedge 彼 \vee の觀念の世界の出来事が語られてゐる。

以上場面を、時間と對をなす空間として捉えてきたが、次に風景として捉えて論じたい。(1)で、 \wedge 彼 \vee の連想が取り上げられていることや直喩の視覚的イメージに \wedge 彼 \vee の心情が託されていることを指摘したが、章の単位でも視覚的イメージが \wedge 彼 \vee の内面を表現する重要な要素となつてゐるからである。

夜は次第に明けて行つた。彼はいつか或町の角に広い市場を見渡してゐた。市場に群がった人々や車はいづれも薔薇色に染まり出した。

彼は一本の巻煙草に火をつけ、靜かに市場の中へ進んで行

つた。するとか細い黒犬が一匹、いきなり彼に吠えかかった。が、彼は驚かなかつた。のみならずその犬さへ愛してゐた。

市場のまん中には篠懸が一本、四方へ枝をひろげてゐた。

彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の真上に星が一つ輝いてゐた。

それは彼の二十五の年、——先生に会つた三月目だつた。

(十一 夜明け) (55・56頁)

これは暗い風景の多いこの作品の中で最も明るい風景である。

「夜明け」という題名もそれに続く「夜は次第に明けていった。」という書き出しも「薔薇色に染まり出した」市場も「ちようど彼の真上に星が輝いてゐた」ことも、この風景を構成しているすべてのものがこの時の△彼▽の気持ち——「彼に吠えかかった」

「犬さへ愛していた」という気持ちと照応している。ここで特に注目したいのは、自信と希望に満ちた△彼▽が輝く星を見ていることである。△彼▽はたびたび自分自身を何かに重ねて見るのだが、この星もそのひとつと考えられる。それは後悔や絶望の中にある時「黄ばんだ羽根さへ虫に食はれてゐた」「剝製の白鳥」(四十九 剝製の白鳥)を見ていたことと対照的である。△彼▽の目に映るものが△彼▽の気分を反映しているので背景を構成しているものは気分にも照応している。そこで風景という観点から冒頭に引

用した「一 時代」や「八 火花」、「三十六 古代」、非現実的な場面を設定していると述べた先の五章を捉え直すと、これらは△彼▽と背景にある人や物等との関係により△彼▽の観念の世界を構図化しているとも見ることが出来る。このように△彼▽の内面(気分・思想・価値観等)を物語っているという意味では、それぞれの章は心象風景になっている。そして作品全体の中では、気分的心象風景の占める割合が観念的なものよりもはるかに大きいと言えることができる。

(3) △彼▽の人生——生活史と精神史——

はじめに次の四項目を作品の時間に沿って表の形で整理しておく。

- 1 年齢
 - 2 △彼▽が自分を重ねて見たもの
 - 3 美意識や思想的関心
 - 4 △彼▽の人生に直接関わること
- 表に関する注

一——括弧の中の数字は章番号を示す。

二——できる限り作品からの引用にしたが、意味を明確にするため、引用者による言葉を加え、整理した所がある(傍点部分)。

25 (11)歳	23 (7)歳	20 (1)歳	年 齢
彼の真上に星 が一つ輝いて ゐた(11)	江戸以来の向 う島の桜一 列の縊縷のや うに憂鬱だつ た(4)		△彼▽が自分 を重ねて見た もの
懷疑主義 アナ トオル・フラン ス(16)	ゴッゲの画集を 見てゐるうちに 突然画と云ふも のを了解した(7)		美意識や思想的 関心
この紫色の火花だけは、 —— 凄まじい空中の火 花だけは命と取り換へ てもつかまへたかった (8)			△彼▽の人生に直接関 わること
「人生は一行のボオド レルにも若かない。」 (1)			

35 (42)歳	30 (34)歳	29 (19)歳
檣の二つに折 れた船(43)	道化人形(35)	唐黍(22)
善悪の彼岸に悠 々と立つてゐる ゲーテ(45)	七・八年前には色 彩を知らなかつ たのを発見した (34)	理智主義・ヴオ ルテエル(19)
生活的宦官(45)	生活慾は持つてゐない 制作慾だけは持つてゐ る(36)	この画家の中に だれも知らない 詩を発見した(22)
		「形」の美を教 へられてゐた(29)
		英雄 レ・ニン(33)
		人生の歎びや悲しみは 彼の目の下へ沈んで行 つた(19)

剝製の白鳥 頸を挙げて立 つてゐたもの の、黄ばんだ 羽根さへ虫に 食はれてゐた (49)		精神的破産(46) 死の彼に与へる平和を 考へずにはゐられなかつた(48) 彼の前にあるものは唯 発狂か自殺だけだった (49) 「世紀末の悪鬼」は実 際彼を虐んでゐる(50) その日暮らしの生活を してゐた(51)	
---	--	---	--

「或阿呆の一生」は下町の前近代的环境で育った青年が西洋の世紀末の精神と出会う所で始まり、△世紀末の悪鬼▽に虐まされ、と自覚して敗北に至る所までを追った物語である。この作品は実生活上のさまざまな出来事（家庭の事、友人の事、先生の事、恋愛の事、芸術活動の事等）を追っているので生活史になっている。また、前掲の表のような側面から読んでいくと精神史とも言える。まず、(1)で△彼▽の反応と呼んだものと、(2)で取り上げた気分的心象風景の描写を追うと、△彼▽の気分の歴史が明らかにになる。それは、憂鬱と不安の「薄暗がり」で始まるが「十一

夜明け」で希望に満ちた「薔薇色」を迎える。しかしそこを頂点として再び暗い世界へと戻り、「四十四 死」では「まつ暗」になる。十一章から五十一章までは、不安・寂寥・憂鬱・疲労・倦怠・後悔・自己嫌悪・絶望が続く。次に、△彼▽が発見した美や思想的関心を追うと、△彼▽の美意識は「画の了解（七 画）↓詩の発見（二十二 或る画家）↓形の美の発見（二十九 形）↓色彩の美の発見（二十四 色彩）」という変化をする。思想的関心はアナトオル・フランスの懷疑主義（十六 枕）からヴォルテールの理智主義（十九 人工の翼）へ、そして英雄的な生き方をした一人の露西亜人（三十三 英雄）、善悪を超え悠々と生きるゲエテ（四十五 Divan）へと続く。このように「或阿呆の一生」では△彼▽の辿ってきた道を実生活面と精神生活面から見ることができる。△彼▽の実生活は結婚や新聞社への入社等により変化するが、精神生活も変化している。そうした中で唯一変わらなかったものが「一 時代」のアフォーリズムに表れた△彼▽の価値観（所謂芸術至上主義）である。△彼▽にとって、人生よりも芸術に価値があるという人生と芸術の関係だけは終生変わらなかった。そのために「八 火花」では空中の紫色の火花を見て、自分の命と取り換えてもつかまえないとまで思うようになり、「十九 人工の翼」ではついに人生の歓びや悲しみを振り切ってしまう。その

後は、現実を「械」(二十 械)や「娑婆苦に充ち満ちた世界」(二十四 出産)と捉え、「制作慾」はあっても「生活慾」(三十六

倦怠)はないという自覚に至る。そして養父母や伯母に対する

遠慮勝ちな生活(三十五 道化人形)、姉の夫の自殺(四十六

嘘)、友だちの発狂(五十 俘)という実生活上の苦難が続く中

で心身共に衰弱し、自殺か発狂しか残されていない(四十九 剝

製の白鳥)状況を招く。こうして見てくると△彼▽の敗北の原因

は「一 時代」のアフォリズムを信条として徹底的に生きてし

まったことのように考えられる。このアフォリズムは二十歳の

△彼▽の現実蔑視と美への憧憬を示すのみならず△彼▽が一生を

通じて抱いた信条である。ところで同じ芸術家の中には善悪の彼

岸に悠々と立つゲエテ(四十五 Divan)や人生のどん底に落ちた

ヴィヨン(四十六 嘘)のような人物もいるが、△彼▽は彼等と

どこが違うのだろうか。「五 我」には「神々に近い『我』の世

界へ」解放された時に「歓び」と同時に「痛み」を感じるという

体験があるが、△彼▽は現実を超えるものに向かう時このような

矛盾した感情に悩んでいる。また、人生からの離脱を意識した「十

九 人工の翼」以降では「嘘」(二十五 ストリンドベリイ／

四十六 嘘)ということや「善悪」(四十 問答)や「十戒」

(四十一 病)という倫理的な問題に直面している。これは△彼▽

の資質(良心等)の問題であると同時に、美の追求のために犠牲にしてきたものが△彼▽にはかえってはっきり見え、自分の生き方や存在の問題に苦しむようになったことである。△彼▽はそういう場に行き当たった時資質の上からもおかれた状況からも善悪を超えたり現実の生活から逸脱するような行動をとることはできなかった。そしてそういう限界を持った△彼▽が芸術に自己の全存在を賭けようとしたために悲惨な結果を招くことになったのである。

「一 時代」や「五十 俘」の「世紀末」は以上のような観点から△彼▽の人生をふり返って理解したいと思う。世紀末は享樂の追求、退廃的雰囲気として理解されることもあるが、それが△彼▽にとって重要な意味を持つのは別の次元においてである。

△彼▽にとっては△彼▽の生きた「時代」、△彼▽の一生が「世紀末」なのだが、この「世紀末」の本質になるものは、世紀末の芸術家に共通する現実観や美意識や自意識の問題なのである。つまり彼等の捉えた現実とは相対的な不確定なものであり、彼等はその中では満たされず精神の充足のため現実を超越する「一行のボオドレエル」や「火花」という美(理想)を求める。「人生」や「命」に「一行のボオドレエル」や「火花」を対置するのは、自己の全存在を純粋な美に賭ける芸術家の真摯な行為である。と

ころが、その行為は現実との断絶感を一層深くし、その身を滅ぼす危険な状況に芸術家自身を追いつめることになる。その時、人生と芸術のバランスを保てずにいる自分を見つめ、自らのさまざまな限界を見つめ敗北を実感した芸術家に必要なのは心の安息である。

「或阿呆の一生」は、△彼▽が敗北に至る過程を物語ることによって、この「世紀末」の精神を暗示している。しかし(1)(2)を通して見てきたように個々の文や風景の中では△彼▽が実生活の中でどんなに不安や憂鬱を感じ、またどんなに疲れ絶望したかという「世紀末」の精神を持ったが故に味わなければならなかった気分重点が置かれている。また、実生活の不幸な出来事は暗い風景と一体となって△彼▽の敗北へ至る道に拍車をかけている。そのために全体的な暗さと△彼▽の疲労や挫折感が強調され、「世紀末」の本質はその背後にとどまっている。「或阿呆の一生」のこのような性格のうちに「西方の人」執筆の必然性が見えてくる。

二 「西方の人」

(1) 文体——客観性・分析・比喻——

マリアは唯の女人だった。が、或夜聖霊に感じて忽ちクリストを生み落した。我々はあらゆる女人の中に多少のマリア

を感じるであらう。同時に又あらゆる男子の中にも。——いや、我々は炉に燃える火や畠の野菜や素焼の瓶や巖畳に出来た腰かけの中にも多少のマリアを感じるであらう。マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。(以下略)(2 マリア)(5巻 195頁)

この作品で繰り返される「マリア対聖霊」のテーマはこのような形で書き出される。文の視点はマリアでも主人公のクリストでもない第三者にある。そしてそのような客観的な立場からマリアの何について述べているかと言うと、彼女の「永遠に守らんとする」性格である。ひとりのマリアからあらゆる女性や男性、そして人間以外の腰かけ等にも共通する性格(＝日常性)を抽象し△永遠に守らんとするもの▽と呼んでいる。以後「マリア」は人物を示すと同時に日常性を象徴する言葉として用いられるようになる。日常性の中にあるいくつかの側面はこの後に続く物語の中で取り上げられていく。続く「3 聖霊」は超越性を示す「聖霊」に関する叙述であり、マリアを母とし聖霊を父とするクリストはこの相矛盾する性格をもち、両者の対立に苦しむ人間として描かれていく。ところでマリアのこのような描き方には、登場人物やその他の素材を客観的に描き、それぞれの性格を抽象化するという文体の特徴が表れている。主人公のクリストに関しては、彼の

言動を取り上げ、それに理由・感想・評価等を付け加え性格を分析する、というのがこの作品の基本的な型である。分析の結果は次のような性格が指摘されている。「ジャアナリスト・ボヘミアン・天才・理智主義者・背徳者・ロマン主義者・詩人・誰よりも幼な児に近い・共產主義者・無抵抗主義者・最速度の生活者・ジャアナリズム至上主義者・未来を夢みてゐた超阿呆・短篇小説の作者・小説的伝記の主人公・文化人・柔い心臓のあつた」等。これらの言葉にも抽象化という傾向は表れているが、さらに重要な特徴は「ジャアナリスト」や「共產主義」等、近代的な概念で解釈していることである。このことには、この作品にクリストとは時代を異にする多くの芸術家や思想家の名前が出てくるという点にも通じる作者の意識が表れている。それは、主人公のクリストを救い主として、あるいは限られた時代の特定の人物（ナザレのイエス）として捉えるのではなく、時間や空間的条件を超えたさまざまな人物との共通性を見、更に対比することによって相対化しているということである。

次に比喩的表現について考えてみたい。「西方の人」では比喩が多用されているが、ここでは特に人物に関するものと「天国」に関するものを例に挙げる。

クリストの父、大工のヨセフは実はマリア自身だつた。

(4 ヨセフ) (196頁)

ヨセフ(アリマタヤのヨセフ——引用者注)は恐らくはクリストよりも更に世間智に富んだクリストだつたであらう。

(34 クリストの友だち) (207頁)

ゲエテをベエトホヴェンの罵つたのは正にゲエテ自身の中にあるサドカイの徒やパリサイの徒を罵つたのだつた。(続

16 サドカイの徒とパリサイの徒) (216頁)

ここに引用した隠喩には、人物を類型的に捉えているという特徴が表れている。引用文中の「マリア」、「クリスト」(後者)、「サドカイの徒やパリサイの徒」は、具体的な人物としてではなく別の意味を負う象徴的存在として用いられている。即ち「マリア」は守らんとする性格を、「クリスト」は超えんとする性格を、「サドカイの徒……」は俗物性(「マリア」のマイナスの変奏)を、という具合である。従つて大工のヨセフ、アリマタヤのヨセフ、ゲエテの方もそれぞれの個性を総合的に描くのではなく、ある側面に着目し、それを基準に類型化していることになる。この他にもヘロデを「大きな機械」に、ピラトを「代名詞」に喩える等、人物の性格を規定する時比喩が用いられているが、このように多くの人物を類型化して主人公との関係を明らかにすることにより主人公の性格を浮かび上がらせているのである。また、このことは

人物以外の要素にもあてはまる。

石鹼の勻のする薔薇の花に満ちたクリスト教の天国はいつか空中に消えてしまった。が、我々はその代りに幾つかの天国を造り出してゐる。クリストは我々に天国に対する憧憬を呼び起した第一人だった。(略)クリストは兎に角我々に現世の向うにあるものを指し示した。(18 クリスト教)(200頁) 彼は勿論人生よりも天国を重んじた詩人だった。(28 イエルサレム)(204頁)

が「天国は近づけり」の声もやはり我々を立たせずにはならない。(37 東方の人)(209頁)

「西方の人」では「天国」が実体として捉えにくく、比喩的である。福音書には譬話による説明(マタイ十三章やマルコ四章等)があるが、それもない。「天国」は「現世の向うにあるもの」であり、情熱に燃えた聖霊の子供が望むものであり、「人生」に対立するものである。聖書の神の救済史的行為との関係には触れられず、次の表に示すような人との関係が問題となっている。A群の用語は福音書でも使われているもので、B群の用語は「西方の人」に独自のものである。^{注4}

		① 人の内面的な態度	② 人が求めるもの	③ ②の表現
A群	信仰 悔い改める	神 天国 神の国 限りなき命	譬喩	
B群	想像 美しい一瞬を 感激 もつ	詩的正義 現世の向うにあるもの	詩 文芸 短篇小説	

①②③の関係は、②は①のような態度の人が求めるもの、③は②を言葉で表現したもの、①は③を理解する人の態度で③を表現する人はクリストである。また、聖霊は人を②に向かわせるものである。B群の事柄は福音書の世界にあるA群の事柄から抽象されていて、A群とB群の間には①—②—③の諸要素間の関係に共通性のある平行関係がある。「天国」を中心とするこのような比喩的表現によって信仰の問題が想像力の問題に転化され普遍化されている。「西方の人」ではこの他にも比喩が幾重にも重なり文章は読みにくいが、「マリア対聖霊」の対立原理が構想的枠ぐみとして一貫し、多くの比喩はこの原理の変奏となっている。

(2) 構成——物語と批評——

正統「西方の人」はそれぞれ三十七章、二十二章の題を付した

短章から成っている。正篇では、クリストの誕生から苦しみを受けて葬られるまでの物語を大体福音書（特に共観福音書）の順に従って辿られているが、続篇では物語の繰り返しは少なく作者が独自の観点から主人公を批評している章が多い。福音書と較べると、悪魔との問答までの公活動以前が正篇全体の約三分の一を占めているという点や、奇蹟物語や主人公の講話を主体にした章がないという点で、主人公の活動自体にかける比重が小さいこと、そしてその内容に具体性が乏しいことが指摘できる。ひとつの章には、人物の具体的な言動を描いた出来事の部分と、人物の言動を分析批評し性格を規定する部分がある。前者に重点を置いた章を物語の章、後者に重点を置いた章を批評の章と呼ぶことにすると、正篇は始めに「2 マリア」、「3 聖霊」と批評の章が続き、クリストの出生に後の内的葛藤の原因を置いている。その後は物語の章でジャアナリストになった頃までのことを追い、次に批評の章でクリストの性格や教えについて述べられている（「18 クリスト教」）（「22 詩人」）。そして再び物語の章で受難に向かう過程、受難、死が語られ、クリストの死後は批評の章が続く「我々」にとってクリストは何だったのかということが述べられている。このように物語と批評を組み合わせるによりクリスト像は構築され、作品が構成されている。

時間、空間という問題では、クリストは一応ユダヤの社会の間として登場するものの、そのユダヤの社会の出来事は常にあらゆる時代、場所で起こることとして語られている。つまり「西方の人」では時間的空間的枠付けには意味がない。これは「歴史的事実や地理的事実を顧みない」（1 この人を見よ）という作者の言葉と照応する。作品内部の時間の流れを詳しく見ると、同じ出来事が章を隔てて幾度も取り上げられたり、物語の途中にクリストの死後の世界との比較をする批評が入ったりするので直線的とは言えず、自然的時間とは異質である。場面については、物語の章の中で、クリストの体験した出来事を語ると同時に内的葛藤を暗示し、場面がひとつの比喩になっているものがある。「12 悪魔」、「17 背徳者」、「24 カナの饗宴」、「25 天に近い山の上の問答」、「28 イエルサレム」（後半）、「31 クリストよりもバラバを」がこれに当たる。これらの章では、クリストは他者との対立関係にあったり物理的に高い所に位置したりする。（1）で述べたように人物や物は具体的な個性よりも象徴的意味を負う比喩的存在として機能しているためにそれが場面の性格にまで関わっているのである。

(3) クリストの一生——「折れた梯子」の意味——

クリストは「母のマリアよりも父の聖霊の支配を受けてゐた」

(36 クリストの一生)。聖霊は彼を「嫌でも応でも人気のない天に向」かわせる(25 天に近い山の上の問答)。だから彼は「詩的正義」や「天国」を日常的現実よりも重んじる「詩人」である。

そして理想のために衣食住という生活の条件や、社会や家庭の人間関係や、秩序を守る道徳等を犠牲にする。作者は、人と人とはどういふ関係であるべきか、という福音書の主人公の教えにはほとんど触れず、^{注5}「彼の道は唯詩的に——あすの日を思ひ煩はずに生活しろと云ふことに存してゐる」(18 クリスト教)と述べている。しかし彼も「時代」や「社会」(24 カナの饗宴)を超えられない人間のひとりである以上理想を求めるだけでは生きていけない。「ジャアナリスト」として現実を直視し他者と関わる彼はそれを知っている。「西方の人」はそうした人間としての限界を負ったクリストが「彼自身も『善き者』でないことを知りながら、詩的正義の為に戦ひつづけた」(20 エホバ／続9 クリストの確信)一生を描いている。そこでまずその戦いの跡を追ってみた。クリストは「12 悪魔」、「17 背徳者」、「21 故郷」、「24 カナの饗宴」で、それぞれ自身の中のマリア的性格(生活に必

要な条件を守ろうとする心理・地上での成功を望む心理・他者に対する母性的情愛)と対立し、それらを退け、孤独と戦い、全ユダヤ(社会)を敵にしている。そしてその結果現実の世界での行場を失い、如何に生くべき乎、悩むようになる。

クリストは高い山の上に彼の前に生まれたクリストたち——モオゼやエリアと話をした。(略)彼はこの時に、——やつと三十歳に及んだ時に彼の一生の総決算をしなければならぬい苦しみを嘗めてゐた。(略)天に近い山の上には氷のやうに澄んだ日の光の中に岩むらの聳えてゐるだけである。しかし深い谷の底には拓榴や無花果も勻つてゐたであらう。そこには又家々の煙もかすかに立ち昇つてゐたかも知れない。クリストも亦恐らくはかう云ふ下界の人生に懐きを感じずにはゐなかつたであらう。しかし彼の道は嫌でも応でも人気のない天に向つてゐる。彼の誕生を告げた星は——或は彼を生んだ聖霊は彼に平和を与へようとしぬ。(以下略) (25 天に近い山の上の問答) (203頁)

クリストはここで「人気のない天」か「下界の人生」のどちらかを選ばなければならない。この時彼の見た天は純粹で美しいけれども人の住めるような所ではない。それに対して下界には生活の喜びや家庭の平和を象徴する果実の香りや家々から立ち昇る煙

がある。△炉辺の幸福▽には「譴」（24 カナの饗宴）があると
しても安息を得るとしたらそこに帰る他ない。しかし彼の中の聖
霊がそれを許さないので、彼は再び自身の中のマリア（平和な暮
しに憧れる気持ち）と戦いそれを退ける。そしてその後、何とか
現実の生活と調和したいと願い自身の中の聖霊とも戦う（28 イ
エルサレム）。また、十字架の直前の尋問の場面ではマリア（生
命を守ろうとする本能）に叛逆する（31 クリストよりもバラバ
を）。

以上見てきたようにクリストの人生は対外的にも対内的にも戦
いを重ねた人生である。作者は受難の場面を二度も取り上げ（32
ゴルゴダ／続20 受難）、クリストの絶望や苦痛を強調し、「人生
に失敗した」（続2 彼の伝記作者）ということをも全面的に認め
た上で、そこに意味を見出している。

クリストの一生は見じめだった。が、彼の後に生まれた聖
霊の子供たちの一生を象徴してゐた。（略）けれどもクリス
トの一生はいつも我々を動かすであらう。それは天上から地
上へ登る為に残りにも折れた梯子である。薄暗い空から叩き
つける土砂降りの雨の中に傾いたまま。……（36 クリスト
の一生）（209頁）

聖霊的性格が強かったクリストは最も悲惨な死に方をした。作

者はそういうクリストの一生を「天上から地上へ登る為に残り
にも折れた梯子」に喩えている。ところでこの箇所に対してはさま
ざまな解釈があり議論が続いている。吉田精一氏、笹渕友一氏、
三好行雄氏は「天上から地上へ」を誤記とする。^{注6}これに対し佐藤
泰正氏、梶木剛氏、高田瑞穂氏、関口安義氏、磯田光一氏等はそ
れぞれの観点から原文通りに読み、この逆説的な表現に意味を見
出している。^{注7}原文通りに読む立場に共通する点は、この「折れた
梯子」にクリストの「地上志向」^{注8}の挫折を見ている点である。小
論では後者の立場を支持し、次のように解釈する。「西方の人」
ではそれぞれの言葉はイメージよりも意味が優先される。従って
「天上」は上方というイメージではなくクリストの内的理想の世
界と考えられる。「地上」はマリアたちの日常的現実の世界であ
る。クリストが生き続ける為には、聖霊の子供であることを放棄
してマリアの生き方に習うか、あるいは後代の聖霊の子供のひと
りであるゲエテのようにマリアと聖霊の吊り合いを保たなければ
ならない。「天上から地上へ……」の一句はこのどちらの生き方
にも従えず生きていく道が終に閉ざされてしまったことを意味す
る。クリストは世俗的社会を生きていくにはあまりにも純粹すぎ
たのである。

我々は唯茫々とした人生の中に佇んでゐる。我々に平和を

与へるものは眠りの外にある訣はない。(略)しかし聖霊の子供たちはいつもかう云ふ人生の上に何か美しいものを残して行つた。何か「永遠に超えようとするもの」を。(35 復活) (208頁)

生きていく以上は「涙の谷」(2 マリア/続8 或時のマリア)や「人間苦」(6 羊飼ひたち)、「世界苦」(18 クリスト教)がある。それでも平和に暮らそうとするのなら、マリアのようにすべての現実を受け入れるより仕方がない。しかし聖霊の子供たちにはそれができないので、内的葛藤や社会との対立を繰り返さなければならない。彼の一生は現実には失敗だったが人間として最後まで戦い抜いたのでそこに掛け替えない美しさがあり「我々を動か」し、いつまでも「我々の心を燃え上らせる」(続22 貧しい人たちへ)。またそういう背景があるから彼の詩も美しい。現実的には無意味でもこの点において彼は我々に必要である。「西方の人」はこのようなクリストの一生を描くことにより、クリストに代表される理想家に共通した内面の問題や現実との対立の問題を検討している。この時空の条件を超えた普遍的なテーマを追求するために比喩(象徴)や批評や物語が不可欠だった。つまり、人物や物はそれぞれの個性よりもクリストとの根本的な(対立原理に還元される)関係が重要となり、それを原型的イメ

ージによって表現する比喩、その関係を説明する批評、そしてこれらのイメージを生きたものにする物語の展開が必要だった。作者は、この作品では比喩的な感覚思考によって原理を捉えている。この点では一個人の生活史を描き、風景の積み重ねによる物語としての一貫性を保つ「或阿呆の一生」が、人生と芸術の対立というテーマを充分に展開していないことと対照的で、「西方の人」は「或阿呆の一生」のテーマを引き継いだ作品と言える。さらに両作品を比較すると、「西方の人」では「マリア」がクリスト自身のマリア的性格として、あるいはその他の登場人物としてさまざまな形に変奏されているが、その中でマリアという人物(クリストの母親)は現実世界にある美しさを示し、クリストを現実に引き戻そうとする唯一の存在である。「或阿呆の一生」における現実世界にはこのような存在はなく、「娑婆苦」というマイナスイメージに統一されているので、彼が現実を切り捨てるという図式は単純である。しかしクリストが「天国」に向かうのは現実からの逃避を意味するのではなく、本人の意志を超えたより複雑な問題をはらんでいる。クリストの内的葛藤は現実の中にあるこの肯定的価値、「美しいマリア」(17 背徳者/続8 或時のマリア)を認めているために、彼の場合よりも一層悲壮なものになっている。また「西方の人」は物語に批評を組み合わせることに

より、マリアの性格が弱過ぎたというクリストの敗北原因を明確に示し、さらに彼の一生を「何か美しいものを残して行つた。」と意味付けているが、これは「或阿呆の一生」には見られない「西方の人」固有の性格である。

三 「或阿呆の一生」から「西方の人」へ

芥川龍之介にとって「或阿呆の一生」と「西方の人」はどのような意味をもつ作品だったのだろうか。一、二で述べてきたことと芥川の書いた他の文章をもとに考えてみたい。

「或阿呆の一生」は美を求めて生きた自分はどんな人間だったのか、ということを実生活面を中心に振り返った作品である。彼は生活史の中で敗北に至る過程を辿り、さまざまな暗い風景をくり返すことによって不安や絶望を具体的に示し、死がどんなに必然なのかということを伝えようとしている。それに対し「西方の人」はクリストという他者の一生を精神生活面を中心に追った作品である。彼はクリストの内的葛藤を強調し、その人生に意味付けをすることにより自身の問題を検討している。彼は「はじめに」で述べたようにクリストの中に自身を発見していたのである。このように見えてくると、「或阿呆の一生」と「西方の人」は同じ問題をかかえた人物の一生を一方は実生活面から、他方は精神生

活面から捉えるという相補的關係にあり、芥川の自己認識の二つの表われと考えることができる。一、二で見てきた両作品の表現形式の対照性には、作者の認識方法の違いが表われていたのである。「或阿呆の一生」を書き上げた後「西方の人」が書かれた理由は、両作品の比較によると、彼の捉えた精神生活面の自分の一生を振り返り敗北の原因を明確にすると共にその人生にも意味があることを述べる為だったと言える。また、結果的には自ら生きていく道を閉ざし、この現実世界を嫌悪していたかのように見える主人公にもマリアの安らぎに対する憧れがあったことを示すことにより、芥川自身が単純な厭世観から自殺を遂げたのではなく、彼が最後まで現実世界にある肯定的価値も認めていたということを示そうとしたのではないかと思われる。芥川は昭和元年の十二月にクリストに関して次のようなことを書いている。

クリストを十字架に駆りやつた者はクリスト自身の宗教だつたらう。斯ういふのは単に新しい宗教を説いた為に、十字架に懸つたといふ意味ではない。新しい宗教を説いてゐるうちに、十字架に懸らねばならぬ気持ちになつて仕舞つたのだと云ふのである。(略)が、僕の解釈のやうに十字架にかなければならなくなつたクリストの気持ちを想像すれば、そこに僕等の日常の気持ちにも近いものがありはしないかと思つ

て居る。〔文芸雑誌〕昭和二年一月『文芸春秋』(5巻 121頁)

現実世界での安らぎを求めていながらなおクリストや芥川が「十字架に懸らねばならぬ気持ちになつて仕舞つた」のは彼等がマリアよりも聖霊に支配されていたためである。聖霊の力によつて「天国」に向かう過程は、それをつきつめていくと実生活上は滅びに至る過程となる。そして人を滅びに導びくという観点からみると「聖霊」は「悪鬼」となる。次にこの「悪鬼」について考へたい。

ボードレールの散文詩をよんで最もなつかしきは悪の讃美にあらず彼の善に対する憧憬なり遠慮なく云へば善悪一如のものを自分は見てゐるやうな気がする也(略)これが現前せずば芸術を語る資格なき人のやうな気がするなり(大正三年一月二十一日 恒藤恭宛書簡) (7巻 55頁)

我々が彼等(ポオやボードレール——引用者注)の耽美主義から、厳肅な感激を浴びせられるのは、実にこの「地獄のドン・ジュアン」のやうな冷酷な心の苦しみを見せつけられるからである。(「あの頃の自分の事」大正八年一月『中央公論』(1巻 385頁))

ポオドレエルは「或阿呆の一生」のアフォーリズムからもわかるとおり、芥川が若い頃から最も心酔していた詩人のひとりである。

芥川が彼の作品を評価する時、作品の背後にある詩人の自意識に共感を寄せていることにここでは注目したい。「あの頃の自分の事」によるとポオやボードレエルは、「仕末に了えない心」を抱いた因果に、嫌でも道徳や神や恋愛を捨てなければならなかった。だから彼等の耽美主義や作品にはその心と睨み合った彼等の「せつばつまつた嘆声」が表れている、というのである。このようなポオドレエル観からは次のようなことが考えられる。それは、芥川の美というものの背後には芸術家のどうにもならない矛盾した自意識が控えているということ。また芥川自身を滅びに導いたものはこの世紀末の芸術から学びとった芸術家の意識であり、これが「或阿呆の一生」の△世紀末の悪鬼△だったのではないか、ということである。小論では「一行のポオドレエル」や「火花」や「天国」を「美」、「芸術」、「理想」という言葉で理解してきたが、芥川には、それらはさまざまな苦闘を通じて得られる美だったのである。彼はこういう美意識を最後まで捨てられなかったために自分を追いつめることになり、疲れ果て安らぎを求めるようになった時も他方ではそれを拒否しなければならなかったのである。そして、自ら命を絶つ時までこのような芸術家の意識を堅持していたということを「西方の人」のクリスト像が——「我々の心を燃え上らせる」というクリストが——物語っている。

おわりに

「或阿呆の一生」と「西方の人」について論じるのに、私は作品の表現形式の分析にかなりの比重をかけた。それは、形式は作品のメッセージと有機的に結びついていると考えたためである。比喻の多い「西方の人」のメッセージを理解するためには比喻に関する考察が必要だと思われた。また次のような評家の言葉からも示唆を得た。

キリスト伝を伝えた四人の伝記作者のその表現の仕方と、

『西方の人』の作者の描写の仕方には、ある必然の類似が見られる。^{注9}

(イエスの行跡の時代・環境を越えた普遍的な意味を浮びあがらせようとする芥川に——引用者注) 必要なのは、自身自身の直観、というより、正確には、比喻的思考——外面的な相違にとらわれずに、本質的な共通性を見ぬく思考であり、この思考を押しすすめ、また表現していくために適した比喻的な文体である。^{注10}

「西方の人」は議論の多い作品である。小論ではこれを晩年の芥川の自画像と捉え、「或阿呆の一生」との関係から論じたが、芥川の作品史の中での位置づけやキリスト教との関係等、残され

た問題も多い。これらの問題は小論をもとに検討していきたいと思う。

注

注1 以下特に断らない限り正統を合わせて「西方の人」と記す。

注2 『或阿呆の一生』から『西方の人』へ——《母》の残像と《二度目の誕生》その一」昭和47年7月『日本文学』（立教大学）浅野洋一／「夢と成熟——文学的西欧像の変貌・4 五『西方の人』

『続西方の人』昭和54年1月『季刊芸術』大久保喬樹／「或阿呆の一生」試論——改題と『西方の人』執筆との関わりを中心に——昭和57年2月『信州白樺』宮坂寛／「作品論『或阿呆の一生』」昭和58年3月『解釈と鑑賞』関口安義

注3 「十六 枕」、「十七 蝶」、「十九 人工の翼」、「二十 械」、「二十六 古代」では、文の視点が移動し、△彼Vのその時点の主観を越えるということがあるが、これらは例外的と考える。

注4 『限りなき命』（20 エホバ）は、元訳聖書（明治訳聖書）では「永^{かぎりなき}生^{いのち}」・「窮^{かぎりなき}な^{いのち}き生命^{いのち}」等であり、一九五四年改訳聖書（日本聖書協会刊）では「永遠^{えいゑん}の命^{いのち}」となっている。

注5 取り上げられているのは「二つの衣服を持てる者は持たぬ者に分け与へよ」（続3 共産主義者）（ルカによる福音書3章11節）だけである。

注6 「芥川龍之介の人と作品——『西方の人』を中心に——」昭和41年12月『国文学』吉田精一／「芥川龍之介『西方の人』新論——とくに比較文学的に——」昭和52年11月『ノートルダム清心女子大学紀要』笹淵友一／角川文庫「解説」昭和44年9月『或阿呆の一生・侏儒の言葉』三好行雄

注7 『西方の人』論」昭和45年2月『国語と国文学』佐藤泰正／「芥

川における知識人と大衆『西方の人』をめぐって」昭和45年11月『国文学』梶木剛／「『西方の人』論」昭和51年9月『芥川龍之介論考』有精堂 高田瑞穂／「『西方の人』『続西方の人』考」昭和51年12月『都留文科大学研究紀要』関口安義／「芥川龍之介と昭和の文学——『西方の人』を中心に——」昭和43年12月『国文学』磯田光一

注8 「芥川龍之介『西方の人』の一句」昭和52年11月『日本文学』（日本文学協会）99頁 関口安義

注9 「芥川の『西方の人』」昭和48年6月『三枝博音著作集第一巻』95頁 中央公論社 三枝博音（初出『認識論考』昭和3年7月大雄閣）

注10 「夢と成熟——文学的西欧像の変貌・4 五『西方の人』『続西方の人』」昭和54年1月『季刊芸術』170頁 大久保喬樹

* 芥川作品の引用は筑摩書房刊『芥川龍之介全集』（昭和46年3月〜10月）による。

（昭六十 大学院修了）